

# 旬じょうはん

情勢判断学会 東京本部  
会員向けニューズレター  
発行人 古川 彰久  
事務局 〒252-0321 神奈川県  
相模原市南区相模台1-23-9  
Tel.&Fax.  
042-748-8240  
<http://www.jouhan.com>  
E-mail:info@iki2life.com

## 9月例会ご案内

日時 : 9月8日 木曜日  
18:30 ~ 20:30  
場所 : 港区立産業振興センター  
10階 会議室3  
会費 : 1000円  
テーマ : 「東西古今人間学1」前編  
テープを聴く  
演者 : 鵜殿博文

人間学について難しく書かれている書籍が多いけど、抽象的に人間とはこういうものであるとか書いてある本が沢山あるけれど、そのような事を覚えても何も行動は変わらない。城野さんの人間学とは人間の動きで能力開発から来ている。

人間の脳は外界刺激に反応する。その事により戦略的選択をする。刺激を避けて「逃げる」「近づく」の2択である。それは古代から変わらない。

毎日の暮らしで考えると、今も昔も古代から脳の構造は変わっていない。古代人も現代人も、ご飯を食べて着物を来て家に住まう。その根本は変わっていない。

古代建築は6000年昔から今と同じように、石やレンガで立派な建物に住んでいた。絹や綿もあり、肉や魚を食べていた。体は手足目は2個。口があって鼻もある。

人間の行動に関しても古代の人がこう動いたという事は現代の人の行動に参考になることがある。古代の人が行動して実験をしてくれているので、その行動は現代の人にも役に立つ。

齊の国の晏嬰の一例

秦の国に呼ばれて、犬が入るような小さな門に案内される。本来であれば歓迎されて大きな門

から入るはずであったが、嫌がらせを受けた。その時に、怒って帰るや暴力では戦争になってしまう。どうぞと言わせるために相手の意識を変える必要がある。晏嬰さんは頭を使って相手にどうぞお入りくださいと言わせた。

他にも猛将軍の事例を通じてどのような行動をとったかを考えた。いずれも、様々な切り口で物事を考えて相手の意識を変えて局面を変える事に成功した。

田中角栄の賄賂の事例からの話

日本は少数派の意見も尊重できる社会である。田中角栄は懲役刑になったけど、収容されているわけでないのだから、選挙で新潟で立候補したら20万票集めて当選することができ代議士になることができた。

フランスでは少数派の人間はギロチンにかけられて殺されてしまった。中国では毛沢東やドイツのヒトラーも同じで、少数派を慣用しない。日本ではない他の国では少数派に対して不寛容である。

日本は政治的に高い知性が有るので、其のようなことがおこらず、少数派も取り入れることが出来る。そして欠点を探すのではなく優点を探さなければいけない。

これらの幾つかの事例で、城野さんが公演中に聞いて答えを出せた人がいた。答えがわかるということは古代の人も現代の人も根本的には同じであることを証明しました。

今回は様々な事例から人間の行動は今も昔も同じであることがわかりました。

# 7月例会報告

日時： 7月14日 木曜日  
18:30 ~ 20:30

場所： 港区立産業振興センター  
10階 会議室3

テーマ： 「脳力開発と日本経済」後半  
テープを聴く

演者： 塩沢 貴良

今回も音声 SNS の Clubhouse を使いながら 9 名が集まり議論を行なった。

テープ A 面は経済分析であった。城野氏の経済分析をまとめると 3 つである。

- ① 1900-1969 年の日本の経済成長は 70 年間で 150 倍年率平均 10%以上の成長を続けた。同期間のイギリスの経済成長は 3.6 倍であり、フランスは 6 倍であった。
- ② エコノミックアニマルと揶揄されることもあったが、経済の目的を①人間に食わせ、②着せ、③住ませる。即ち生命を守ることにフォーカスした場合、良い経済成長といえた。
- ③ 1980 年当時日本は円高不況になるとしきりに騒がれた。日本国の株と同じであり、円高は国民全体にとっては良いこと。日本は資源輸入国であり、その資源が安くなることは良いことである。また日本の成長力の力強さを感じ、アラブから投資されるようになり、世界が「円」の価値を認めるようになった。

城野氏の分析に対し、当時を知る参加者が状況を説明した。まとめると次の 3 つである。

- ① 日本の製造業はそれまで生産性向上の努力をしてきたが、1 ドル 70 円という為替相場に対し、日本国内での生産を縮小した。
- ② 大企業にとっては技術の移転をするだけで原価が下がり、収益は改善した。以後この流れが加速した。
- ③ 大企業を支える日本に残る中小企業は海外とのコスト競争でさらにデフレが加速し、疲弊した。新たな研究開発資金が捻出出来なくなった。

以上の城野氏の分析結果と踏まえ、現状の日本

経済の停滞の理由を中心に様々な点から議論をした。要約すると下記のようになった。

『日本には明確な戦略がなかった』

日本の経済戦略例えば「製造業から情報産業へ」舵をきることが出来なかった。理由は日本人の「平等意識」と「現状維持」。特定の産業のみを優遇することが出来なかった。もし、当時「製造業から情報産業へ」の戦略が打ち立てられていたら下記の戦術が組立てられたと考える。

- ① 日本の中小企業の製造業従事者に再教育を施し、情報産業に転職できるようにする。  
→人への投資
- ② 公共事業投資ではなく、情報産業に投資を行なう。  
→戦略に沿った資源の集中投下
- ③ 地方での情報産業投資を活発に行なう。  
→東京一極集中の回避 地方活性化

情報産業は資源輸入の必要はない。日本の条件に合っていた。歴史にもしはないが、当時この戦略を打ち立てていたならば、今の日本とは変わった世界が見えていた。「日本は明確な戦略さえあればうまくいく」城野氏が言った言葉が耳に残った。

テープ B 面をまとめると次のようなものであった。

テープ A 面での城野氏の当時の経済分析を元にもっと日本経済をよくするにはどうしたらよいかと城野氏が提言したことは下記の点である。

140 億個の脳細胞を正しくつかうこと。即ち戦略的發展を考える。現状維持を選ばない。戦略的發展を遂げるには、条件と原因を明確にする。たとえば日本経済発展の原因を朝鮮戦争と言う人が多い。これは違う。ひどい親の元でも立派な子は育つ。親は原因ではなく、条件である。円安も条件。条件は①動かさないか、②良い条件にできないかと考え、点検、実行を行ない、うまくいった場合はその優点は何か、戦略に合致しているかを反復する。

もっと日本経済の発展を考えるなら次の 3 つに

注力する

- ① 主体的にやる姿勢（他人のせいに、条件のせいにしない）
- ② 進歩発展の姿勢（現状維持は衰退の始まり）
- ③ 相手の利益を考える。（相手6分自分4分）  
バランスが大切自分ばかりでは仲間が離れ、相手の利益ばかりだと続かない。相手6分に自分4分がもっとも仲間が増える割合。

上記の城野氏のまとめに対し、参加者の議論をまとめる。

- ・城野氏が一貫して主張していることである。
- ・今の世の中でもこの主張は古くならず、本質を突いている。

さらに演者である塩沢は今回の議論をもとに下記のようにまとめた

城野宏はまず戦略を決めよと言う。ここでの戦略は進歩発展か現状維持か？現状維持を選べば戦術は「人の話は聞かない」「前例踏襲」「昔の成功体験ばかりを言う」となり、世界が進歩するので衰退する。城野宏氏は「戦略さえあれば日本人は優秀」といている。国家の戦略は？当社の戦略は何なのか？あなたの戦略は何なのか？それは戦略と戦術を混同していないか？城野宏はどんな時代でも通用する本質的な考え方を教えてくれた。私はこの考え方を今後多くの人に伝えて行きたい。

